

ライフ・サイクルと対応する価値志向の縦断的研究

大井 直子

情報化と国際化が著しく進んだ現代は、価値の多様化時代といわれている。急激な社会の変動の中で、人は社会や文化に影響されつつ、個々人の経験を通して、その人固有の価値志向を持つに至るであろう。

Allport, G. W. (1955) は、健全な成人は価値図式の影響下で発達をとげるものだと述べている。また成熟したパーソナリティの判定基準として、自己拡張、他者との緊密な関係、情緒的安定（自己受容）、現実的知覚、自己の客観化、一貫した人生観の6つをあげている（Allport, 1961）。特性論的立場からパーソナリティの階層的体系を考えたAllport (1937, 1966) や、人格の発達分化の図式によって人間の生涯全般に渡る心理社会的発達段階を明確化したErikson, E. H. (1959) に従えば、パーソナリティの一側面であるとともに、他の側面を統合する役割をもつ価値志向（人生観）は、life cycle（年齢）に応じて発達するものと考えられる。しかしながら、他方では、行動の決定因は主として状況的变化にあると考えているMischel (1968) やMilgram (1974) によると、価値志向の発達や一貫性は行動の決定に大きな役割を演じないことになる。価値志向は果たして個人の中に内在化し発達するものなのか、もし発達するとするならば、どのような様相で変化するのであるだろうか。

価値志向の発達を規定する直接的要因としては第一に生活年齢が考えられるが、しかしNesselroade他 (1974) は、個体発生的パターンは年齢よりもその人のlife eventsや環境の歴史的社会的変化と共変する可能性が強いと指摘している。またBaltes (1968) は、同じ年齢でも異なる時代に属する人々

は、彼らが生活した時代によって異なる経験を持つというコーホート効果を立証している。さらにElder (1974) は、恐慌経験とライフコースの関係を追跡研究し、生涯にわたる個人の発達と家族の相互作用、歴史的変化や社会的変動との相互作用という視点から分析を行い、恐慌で経験された経済困窮が、人生における「主要な関心や価値観」に長期に渡って影響していることを明らかにした。

すなわち個人の価値志向の発達的变化は、単に加齢によって生起される現象ではなく、年齢に応じて社会的環境から求められる役割によって変化するものと考えられる。またElder等の指摘から、社会的環境には様々のものがあるが、その内の時代環境の軸が価値志向の発達的变化を捉えるには重要であると考えられる。

EriksonやAllportが考えたように、価値志向の形成過程は、社会化の過程であるとともに、個性化の過程でもある。児童期ではまだ人生の目的などは考えられないが、両親やその他の家族との相互作用的關係の中で、社会の価値志向を反映した具体的な行動様式を同一視によって習得し、さらに友人関係や教師との関係へと生活空間が広がり、その中で行動規範を身につけていくと考えられる。青年期になると、急速な身体的発達・性的成熟に伴って自己概念がゆらぎ、新たに自分自身は何であり、自分の社会的役割は何であるかを捜し求める。それまで無意識的に取り入れていたものを、意識的にとらえ直し、主体的判断による取捨選択がなされ、その人固有の価値志向として内在化されていく。さらに就職、結婚、新しくできた家族との相互作用など対人関係の経験を通して、中年期では価値志向はより強固に統合され、その人固有の中核的態度となると考えられる。

そこで、本研究の主題は、個人の価値志向は必然的にやがて固有の中核的な態度として育っていくものなのか、或いは状況に応じて常時変化するものなのかの解明にあり、したがって青年期から中年期まで個人毎に一貫したものを見い出し得るか否か、を中心課題とする。

価値志向の発達的变化を捉えるには、年齢的效果と共に、時代的效果を捉

1 質問紙による調査

1. 1 価値志向の基本構造（調査 I）

1. 1. 1 目的

本調査は、価値志向の基本的構造を因子分析を用いて検討するものである。

第2章で述べたように、Morris (1956a) は人生観が基本的3要素から成り立つというモデルを提唱した。Osgood et al. (1961) も、その基本的3要素と彼の開発したSD法から抽出された3因子がほぼ対応していることを明らかにした。また、多くの研究者によって様々な基本構造が提出されているが、原・大井・岡林 (1991) の研究は、「13の生き方」質問紙をICUの学生に施行し、その回答を因子分析した結果から、現代の学生の特徴を最も捉えやすい4次元構造を提案した。そこで本調査では、下記の仮説に基づいて考察することとする。

仮説1. 人生観には時代差や世代差を超えて共通の因子構造が見い出される。

1. 1. 2 方法

被験者：本学において施行された価値観研究に参加した被験者の総数は図1に示す通りで、延べ4,000名を超えている。ただし、60年代の被験者の内には、在学中に3回、さらに卒業後の追跡調査を加えて計4回、また、90年代の被験者には入学直前とその後の計2回、それぞれ異なる時期に回答した同一被験者が相当数含まれるので、被験者の実数はこれら資料の総数を少し下回る。

これらの内、60年代の資料はTroyer, 藤田, 北山, 永野, および原 (1963) によって、また80年代の資料は岩崎, 石塚, 原 (1984) によって収集された調査資料の中から該当する部分を借用したものであり、90年代の資料は本稿の著者

を含めた共同研究者たちが収集したものである。

調査用紙 : Morris (1956b) が開発した「13の生き方」質問紙の日本語版（一部改正）を使用した。回答方法は7件法の評定尺度を使用した。

手続き : 60年代の在學生には授業中に実施し、彼らの両親には学生を通して回答を依頼した。80年代の被験者には学内学生用メッセージボックスを通して質問紙を配布した。1990年度の1年生、60年代の卒業生、1993年度の1年生とその両親には郵送法で、また、90年代の残りの被験者にはメッセージボックスを通して質問紙への回答を依頼した。

1. 1. 3 結果と考察

「13の生き方」質問紙に回答した全被験者の評定得点（好ましさの中位点を評定得点4とし、「非常に好ましい」を7、「非常に好ましくない」を1と重みづけした。）について主成分分析を行った後、ヴァリマックス回転を施し、先行研究（原,1991）と同様に4つの因子を抽出した。各項目毎に得られた因子負荷量は表1の通りである。高い因子負荷量（.40以上）の質問項目は、第Ⅰ因子には生き方L13（奉仕）・L3（慈愛）・L1（中庸）・L10（克己）・L4（享楽）、第Ⅱ因子にはL2（達観）・L11（瞑想）・L9（受容）、第Ⅲ因子にはL6（努力）・L12（行動）・L5（協同）、また、第Ⅳ因子にはL8（安楽）・L7（多彩）が含まれていた。第Ⅰ因子から第Ⅲ因子までは、Morris (1956b) の基本的3要素にほぼ対応していると考えられる。それ故、第Ⅰ因子は“ディオニソス要因”の裏返しである「慈愛奉仕」、第Ⅱ因子は“ブッダ要因”と類似している「内面生活」、第Ⅲ因子は“プロメテウス要因”と類似している「積極行動」と名付けた。そして第Ⅳ因子は、現代の社会的傾向としてよく言われるところの、1つの生き方にこだわらず、状況に応じて柔軟に生き方を変え、安楽を好むという特徴を示しているところから、先行研究（原,1992）と同様に「安楽多彩」と名付けた。

表1 「13の生き方」質問紙の因子構造 (N=4089)

項目	I	II	III	IV	共通性
L13 奉仕	.72	-.02	.13	.03	.54
L 3 慈愛	.66	.10	.01	-.02	.45
L 1 中庸	.55	.06	-.18	.29	.42
L10 克己	.52	.19	.12	-.24	.38
L 4 享楽	-.49	.41	.26	.20	.52
L 2 達観	-.03	.73	-.05	-.10	.56
L11 瞑想	.17	.71	-.01	.05	.53
L 9 受容	.10	.59	-.06	.39	.51
L 6 努力	.11	-.01	.75	-.12	.60
L12 行動	-.18	.04	.71	.08	.54
L 5 協同	.38	-.27	.54	.14	.53
L 8 安楽	.05	.14	.00	.76	.60
L 7 多彩	-.07	-.12	.05	.70	.52
固有値	2.04	1.81	1.52	1.34	
寄与率(%)	15.7	13.9	11.7	10.3	
累積寄与率(%)	15.7	29.6	41.2	51.5	

各年度ならびに時代毎に分けた被験者群にも上記と同様の処理を別々に行った。第I因子と第IV因子では多少の変動が時代によってあるが、年代毎に大きな被験者群で纏めると、4因子構造の安定性が一応確認された。それ故、「13の生き方」につき全被験者から抽出された4因子を共通の基本構造とする。

ところで、Morris (1956a) はL7 (多彩) は基本的3要素を等しく包含し、他の生き方を調和統合する理想的類型であると述べている。しかしながら本調査では、L7 (多彩) は、第IV因子「安楽多彩」でL8 (安楽) と共に高い因子負荷量を示し (表1)、上で述べたごとく、時代や世代を超えて共通に見られる構造となっている。L7 (多彩) が平穏な中で快楽を追求する私生活優先のL8 (安楽) と強く結びついていることから、Morrisが考えていたマイトレーヤ的理想型ではなく、むしろ、一つの生き方に偏らず様々な状況に適合しようとするeasy goingな生き方だと被験者に認知されていると考えられる。

1. 2 人生観の時代的变化（調査Ⅱ）

1. 2. 1 大学生の人生観の時代的变化（調査Ⅱ-1）

1. 2. 1. 1 目的

パーソナリティの発達の観点から大学生個人の人生観の追跡研究をする場合、先ずその前提として一般的な時代的变化を押さえておくことが肝要であると考えられる。そこで本章では、60年代と90年代の大学生の間で人生観に変化が見られるかどうかを検討する。

Morris (1956) は、人生観における性差は文化差に比べてごく小さいものであると述べている。しかし、Murphy & Gilligan (1981) は、道徳性の発達においては性役割期待の違いなどから女性に特有の相互依存関係的な側面があると述べている。また Douvan & Adelson (1966) は、青年期における男女差を表す鍵概念として、男性は自立心で女性は人間関係であると指摘している。

ところで60年代から90年代にかけて日本の社会状況は大きく変化しており、たとえば大学では学生数の内、女子学生の占める比率は1962年は19.7%、1992年は29.3%（学校基本調査,1992）となっている。このような女子学生が占める社会的地位の変化から期待される性役割が変化し、それに伴って人生観も変化することが考えられるので、本研究では男女差についても合わせて考察することとする。下記の2つの仮説を立て検証を試みる。

仮説2-1：60年代の1年生群と90年代の1年生群を比較したとき、平均因子得点の間に差がある。

仮説2-2：男子学生と女子学生を比較したとき、平均因子得点の間に差がある。

1. 2. 1. 2 方法

被験者：60年代の1年生1077名（男子学生 570名、女子学生 507名）と90年代の1年生 938名（男子学生 330名、女子学生 608名）を調査対象とした。

分析方法：全被験者から抽出された因子構造（表1）を基に、各被験者の因子得点を算出した。第Ⅰ因子にはL1（中庸）、L3（慈愛）、L10（克己）、L13（奉仕）、L4（-）（享楽）の5項目、第Ⅱ因子にはL2（達観）、L9（受容）、L11（瞑想）の3項目、第Ⅲ因子にはL5（協同）、L6（努力）、L12（行動）の3項目、第Ⅳ因子にはL7（多彩）、L8（安楽）の2項目を各因子を構成している主要項目とし、因子毎にこれらの項目の評定得点を平均して因子得点とした。これら個人の因子得点を基にして、各群の平均因子得点と標準偏差を算出し、また、時代と性による分散分析、およびt検定を行った。

1. 2. 1. 3 結果と考察

それぞれの時代における男子学生と女子学生の因子得点の平均、および両平均の差についてt検定の結果を示した図2より、第Ⅰ因子「慈愛奉仕型」

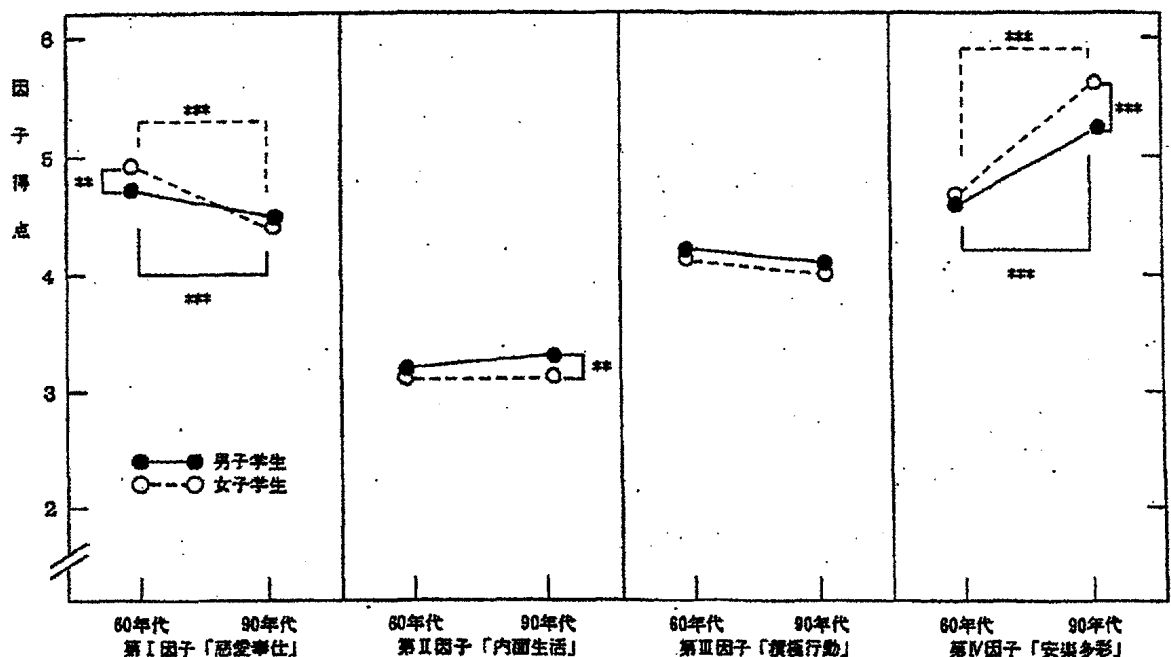


図2 60年代と90年代における男子学生と女子学生の平均因子得点

では60年代には女子学生が有意に高く、男女とも中位点以上の数値を示しながらも90年代の方が有意に低くなった。第Ⅱ因子「内面生活型」では男女とも中位点以下の数値を示し、男子学生はわずかに上昇し、女子学生はわずかに下降しており、90年代には男子学生が女子学生より有意に高くなった。第Ⅲ因子「積極行動型」では男女とも中位点あたりの数値を示し男女差および時代差は見いだされなかった。第Ⅳ因子「安楽多彩型」では、男女とも90年代の方が有意に著しく高くなった。男子学生より女子学生の方が大きく上昇したため、90年代には女子学生が有意に高かった。

時代と性による分散分析の結果、第Ⅰ因子 ($F(1,2014) = 3.91, p < .05$) と第Ⅳ因子 ($F(1,2014) = 12.99, p < .001$) に交互作用が見られた。すなわち第Ⅰ因子では女子学生の減少率が著しく大きく、第Ⅳ因子では女子学生の増加率が著しく大きかった。他者に共感し奉仕する因子(Ⅰ)の時代による落差が大きく、特に女子学生の減少は著しい。内面生活を重要視する因子(Ⅱ)は4因子中最も好まれておらず、好き嫌い相半ばする社会を改革しようとする能動的因子(Ⅲ)と共に時代による変化はほとんど見られない。しかし多元主義的で私生活優先の因子は時代と共に大きく変化をしており、特に女子学生の増加は著しい。

1. 2. 2 両親の人生観の時代的变化(調査Ⅱ-2)

1. 2. 2. 1 目的

本研究では中年期である両親の人生観について時代的变化と性差があるかどうかを、前節(Ⅱ-1)で行った大学生の人生観の時代的变化の調査と同じ方法を用い、下記の2つの仮説に基づいて考察をすることとする。

仮説2-3: 60年代の両親と90年代の両親を比較したとき、平均因子得点間に差がある。

仮説2-4: 父親と母親を比較したとき、平均因子得点の間に差がある。

1. 2. 2. 2 方法

被験者：62・63年度入学生の両親290名（父親 137名、母親 153名）と93年度入学生の両親453名（父親 212名、母親 241名）を調査対象とした。

1. 2. 2. 3 結果と考察

それぞれの時代における父親と母親の因子得点の平均、および両平均の差についてt検定の結果を示した図3より、60年代では父母間の因子得点間に有意な相違が見られたのは第Ⅲ因子「積極行動型」のみであったが、90年代では第Ⅱ因子「内面生活」、第Ⅲ因子「積極行動型」、さらに第Ⅳ因子「安楽多彩型」で有意な差が見られた。そこで90年代には父母間の価値志向の相違が増加したと考えられる。

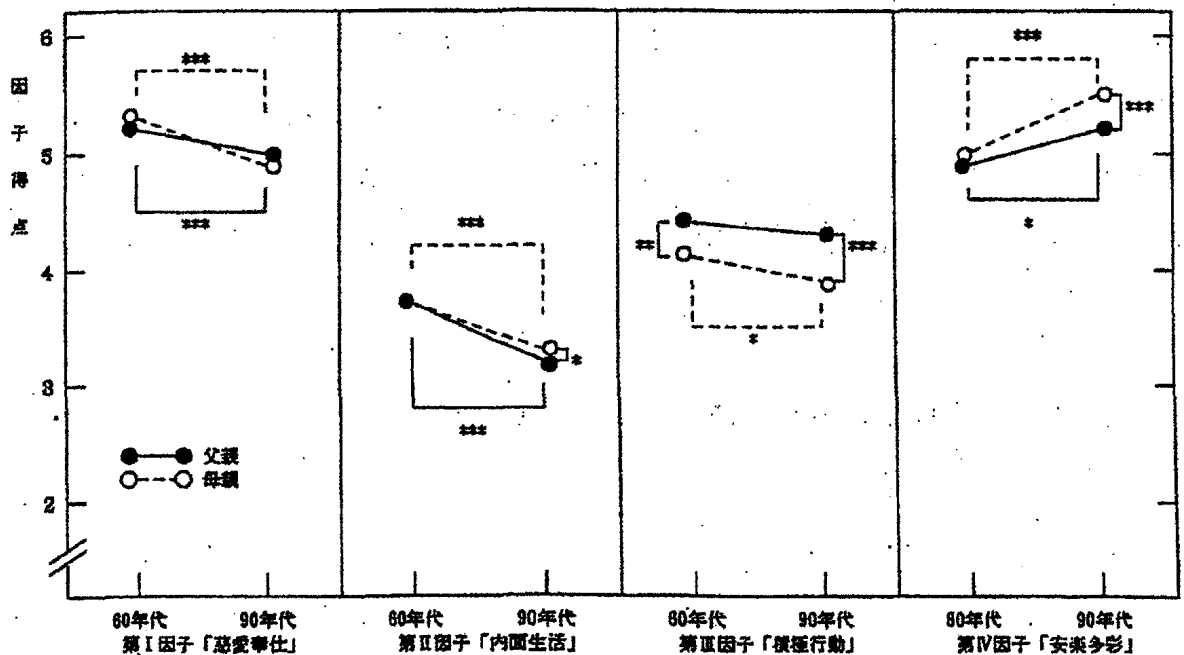


図3 60年代と90年代における父親と母親の平均因子得点

両親とも90年代より60年代の方が第Ⅰ因子「慈愛奉仕型」と第Ⅱ因子「内面生活型」が有意に高かった。第Ⅲ因子「積極行動型」では父親には時代差はなく、母親のみ60年代の方が有意に高かった。第Ⅳ因子「安楽多彩型」では、両親とも90年代の方が有意に高くなった。

60年代には両親とも他者に共感し奉仕する因子（Ⅰ）をその他の3因子よりも好んでいたが、90年代の両親は大きく評価を下げた。一方、時代と共に評価を大きく上げた多元主義的で私生活優先の因子（Ⅳ）が90年代の両親における最も優勢な人生観の因子となった。この傾向は母親において特に著しく、第Ⅳ因子では60年代には父親とあまり相違がなかったが、90年代には父親より有意に高く評価をするようになった。内面生活を重要視する因子（Ⅱ）は両時代とも4因子中最も好まれておらず、やはり時代による落差が大きい。特に父親においてその傾向が大きいため、90年代では父親の方が母親より有意に低く評価するようになった。好き嫌い相半ばする社会を改革しようとする能動的因子（Ⅲ）では父親では時代による変化はほとんどない。しかし60年代の母親はすでに父親よりこの因子を有意に低く評価していたが、90年代の母親はさらに評価を低くし、父母間に大きな相違が出来てきた。

1. 2. 3 大学生と両親の人生観における関連性の時代的变化（調査Ⅱ-3）

1. 2. 3. 1 目的

核家族化、少産少子化、さらに高学歴化などにより、家族の中での親子関係や夫婦関係の変化が推測される。子供から見た母親に比べ、父親の評価が一般的に低いと言われているが、しかし、以前に比べると父親に対する好意的評価は増大し、親子間の情緒的結合が強化されつつあることを示す資料もある（NHK世論調査部,1984）。また、青年期における親子関係の性差としては、女子は母親との接触や交渉がより緊密なため、一方では相互に傷つけ合うことも多いが、同時に信頼感や親密感も大きいと言われている（山田, 1988）。果たして人生観における親子間の比較においても、これと同じような時代的様相や性差が現れるのだろうか。

依田・久世（1959）は、ものの考え方、生活態度、人生観について青年とその親達を比較したところ、父母の相関は高く、親子の相関は父母の相関に比べてさらに高かった。母と娘の相関は、父と息子、母と息子、父と娘の

相関に比べ、相関の有意な場合が多かった。80年代になって、浅井・鈴木(1983)が高校生とその親との関係を調査した結果、親子の間ではそれほど相関が高くなく、娘は父との間より母との間に有意な相関を多く示し、親子に比べ父母の相関は高く、ほとんどの価値領域で有意に相関していた。

本調査では、それぞれの世代固有の人生観があるのか、また、時代の推移と共に、大学生と両親たちの人生観における関連性がどのように変化したのかを、下記の3つの仮説に基づいて考察することを目的とする。

仮説2-5：時代毎に学生と両親を比較すると、平均因子得点の間に差が見い出される。

仮説2-6：60年代の学生と両親の人生観における関連性と90年代のそれとを比較すると、因子得点の相関は時代と共に増加する。

仮説2-7：学生と両親の人生観の関連性に関して、男子学生と女子学生を比較すると、女子学生と母親との間で、相関の高さが最も大きい。

1. 2. 3. 2 方法

被験者：1962・1963年度の1年生（男子50名、女子54名）とその両親、および1993年度の1年生（男子71名、女子117名）とその両親である。

分析方法：各群の因子得点の平均と標準偏差を算出し、時代と親についての分散分析と平均値の差の検定を行った。因子得点について、各時代毎に、男子学生とその父親、男子学生とその母親、男子学生の父親と母親、さらに女子学生とその父親、女子学生とその母親、女子学生の父親と母親間のピアソンの相関係数を算出し、時代間の相関係数の差の検定を行った。

1. 2. 3. 3 結果と考察

それぞれの因子について、各時代の学生、父親ならびに母親の平均因子得点、標準偏差、および時代と親子による分散分析の結果を表2と表3に示した。

表2 60年代の男子学生 (n=50) とその両親、ならびに90年代の男子学生 (n=71) とその両親の因子得点の分散分析の結果

	男子学生	父親	母親	主効果		交互作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	時代	親子間	
第I因子						
60年代	4.75(.70)	5.24(.59)	5.32(.69)	14.94	35.14	ns
90年代	4.32(.84)	5.04(.64)	5.05(.66)	***	***	
第II因子						
60年代	3.18(.80)	3.69(.96)	3.76(1.10)	8.81	6.58	ns
90年代	3.08(1.07)	3.16(1.04)	3.32(.89)	**	**	
第III因子						
60年代	4.20(.97)	4.37(.85)	4.28(.97)	ns	3.97	4.15
90年代	4.29(1.05)	4.28(.80)	3.75(1.04)		*	*
第IV因子						
60年代	4.79(1.15)	5.12(.82)	5.13(.96)	6.83	ns	5.35
90年代	5.51(.82)	5.06(1.12)	5.37(.99)	**		**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表3 60年代の女子学生 (n=54) とその両親、ならびに90年代の女子学生 (n=117) とその両親の因子得点の分散分析の結果

	女子学生	父親	母親	主効果		交互作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	時代	親子間	
第I因子						
60年代	4.78(.76)	5.20(.68)	5.26(.61)	17.75	27.30	ns
90年代	4.37(.89)	4.94(.72)	4.90(.64)	***	***	
第II因子						
60年代	3.14(.80)	3.70(1.12)	3.82(.89)	10.93	14.74	3.75
90年代	3.07(.88)	3.17(.89)	3.36(.96)	***	***	*
第III因子						
60年代	4.12(.84)	4.35(.82)	4.08(.79)	ns	4.91	ns
90年代	3.96(.92)	4.23(.95)	4.00(.97)		**	
第IV因子						
60年代	4.84(1.09)	4.83(1.04)	4.94(.99)	43.76	ns	ns
90年代	5.71(.84)	5.33(.99)	5.63(.96)	***		

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表2より、男子学生において親子間で主効果が見られたのは、第I因子「慈愛奉仕」、第II因子「内面生活」、第III因子「積極行動」で、交互作用が見られたのは、第III因子「積極行動」と第IV因子「安楽多彩」であった。第I因子では両時代とも両親が男子学生より評価が高く、第II因子は60年代のみ両親が学生より有意に高く、第III因子では60年代は両親の方が学生よりわ

ずかに高く、90年代には学生は評価を高くしたが、両親は評価を下げ、中でも母親の評価が学生より低くなり、母子間に有意差が見られた。さらに父母間にも有意差が見られる。第Ⅳ因子では60年代は両親の方が学生より高く、90年代には学生と母親は評価を著しく高くしたが、父親は評価を下げたため、父子間に有意差が見られた。

表3より、女子学生において親子間で主効果が見られたのは、第Ⅰ因子「慈愛奉仕」、第Ⅱ因子「内面生活」、第Ⅲ因子「積極行動」で、交互作用が見られたのは、第Ⅱ因子「内面生活」であった。すなわち第Ⅰ因子では両時代とも両親が学生よりも有意に評価が高く、第Ⅱ因子では60年代のみ両親が有意に高く、90年代は父親が評価を著しく下げたため、母子間でのみ有意差が見られ、第Ⅲ因子では父親が有意に学生より高かった。

すなわち社会的経験を積んだ中年期の両親は青年期の学生よりも、両時代とも共感的で奉仕的ではある。内面性格を重視する傾向では、60年代より90年代の方が両親が学生に近づいたと考えられる。社会を改革しようとする能動的傾向は被験者群によって時代的に異なった変化が見られる。この側面に関して、男子学生の家庭では60年代は3者間の大きな差異はないが、90年代には母親が父親や息子よりかなり低く評価している。一方、女子学生の家庭では60年代は3者の中で父親の評価が最も高く、母親と娘は同水準のより低い評価をしており、90年代では父親と母親ならびに娘との相違がさらに大きくなった。このことから女性、特に母親の置かれている社会的立場、役割が、変革や支配をしようとする能動的なものをあまり必要としないことが、人生観に影響していると考えられる。何かに偏らず、様々なことを柔軟にやりこなし、安易で私生活優先を好む傾向は、60年代は学生、父親、および母親の3者間でほとんど差異がないが、90年代になると父親を除いて母と娘の評価は著しく高くなっている。家庭内で学生と母親が、状況に応じて柔軟に生きることを好み、平穏で安楽な日々を求めていると考えられる。

次に、各時代の男子学生と女子学生それぞれにおける父親と母親との関連性を示した図4である。それぞれの関係において相関係数の高い因子 (r

=.3 以上) を示している。男子学生は両時代とも相関係数の高い因子はなく、女子学生は60年代より90年代の方が母親との相関が第Ⅲ因子 ($p<.01$) において有意に高くなった。また、男子学生の両親間では第Ⅰ因子 ($p<.01$) と第Ⅲ因子 ($p<.05$) において90年代の方が有意に低くなり、女子学生の両親間では第Ⅲ因子 ($p<.10$) と第Ⅳ因子 ($p<.001$) において90年代の方が有意に低くなった。

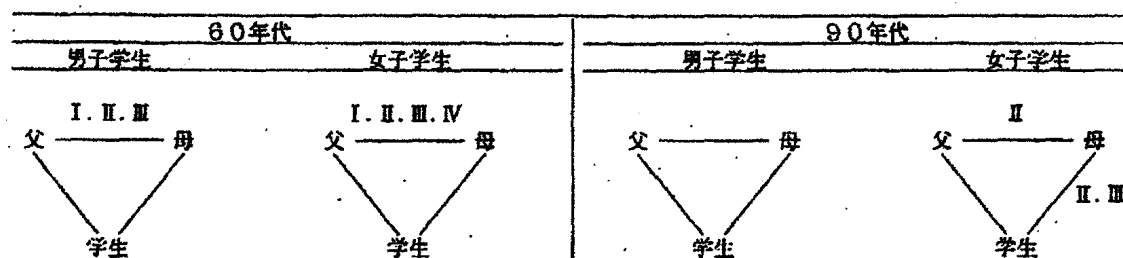


図4 学生、父親、および母親における因子得点の相関係数が高い因子 ($r=.3$ 以上)

男子学生は両親と両時代とも関連が深くないことは、男子学生にとって父親も母親も人生観のモデルではないと推測できる。女子学生は、60年代より90年代の方が両親との相関が高くなり、中でも母親との相関が高くなったということは、この30年間の社会における女性の地位の変化によって、90年代の方が母親との接触が緊密になり、母親との関係が強化されてきたと考えられる。人生観における親子の関連性で、男子学生と女子学生に上記のような差異があるということは、Douvan et al. (1966) やGilligan (1982) が指摘するような性役割期待の違いや、生活の場を共通にするかどうかの頻度の違いが考えられる。また、親子間より両親間の方が相関が高いということは、父母は同じ世代であり同じ時代の影響を受けて育っており、お互いに影響し合いながら生活していることが理由として考えられる。しかしながら母親(女性)の社会的地位の変化や戦後の教育の違いから、母親は夫との人生観の違いを表現できるようになったと考えられる。

依田他 (1959) や浅井他 (1983) の研究においても両親の相関が高く、

親子の相関は両親ほど高くないが、親子関係の中では母と娘の相関が一番高いという結果が確かめられていた。本研究は、同一大学における同一尺度による親子間と両親間の関連性の30年後の時代比較によって、関連性に関しては上記の研究と同様の結果が見られた。さらに本研究でより明らかにしたことは、それらの関連性が時代とともに大きく変化したということである。

60年代と90年代とは明らかに時代環境が異なっていることが示唆されが、この一般的な時代的变化と個人の人生観は共変するのであろうか。それとも60年代に青年期であった人は、その60年代の時代環境との交絡で獲得した人生観を90年代の中年期まで持ち続けるのであろうかを、次節の縦断的比較によって、見ていくことにする。

1. 3 青年期と中年期の人生観の比較（調査Ⅲ）

1. 3. 1 目的

個人の価値志向の発達的变化を捉えるには、加齢にともなう社会的役割要請の影響による年齢効果、調査時期の固有の影響による時代的效果、さらに個人的要因（life events）などを考察することが必要であろう。

ここでは縦断調査により、大学時代と卒業30年後の追跡時の人生観の比較をし、学生や両親の人生観に見られた時代的变化の傾向と、学生との相違点として見い出された中年期の両親の人生観の特徴が、追跡時の人生観に見い出されるか否かを下記の仮説に基づいて検討する。

仮説3-1：同一被験者の60年代の大学時代と90年代の追跡時の資料を比較したとき、平均因子得点の間に差が見られ、それに調査Ⅱで見い出された時代的傾向や世代の特徴が時代的效果や年齢的效果として現れる。

1. 3. 2 方法

被験者：追跡調査の回答者の1年次および追跡時 92名（男性；38名、

女性54名)を調査対象とする。

手続き：大学時代の資料は一般教育の授業で施行したもの、また、過去の資料がある卒業生(1077名)には質問紙を郵送し協力を求めた。

分析方法：個人の因子得点を基にして、各群の平均因子得点と標準偏差、ならびに調査時間の相関係数を算出し、また、調査時と性による分散分析、およびt検定を行った。

1. 3. 3 結果と考察

在学時と追跡時における男女の因子得点の平均、およびt検定の結果を示した図5より、男性において追跡時の方が在学時よりも有意に評価が高かったのは第IV因子「安楽多彩」であった。一方、女性において追跡時の方が在学時よりも有意に評価が低かったのは第III因子「積極行動」で、評価が高かったのは第IV因子「安楽多彩」であった。

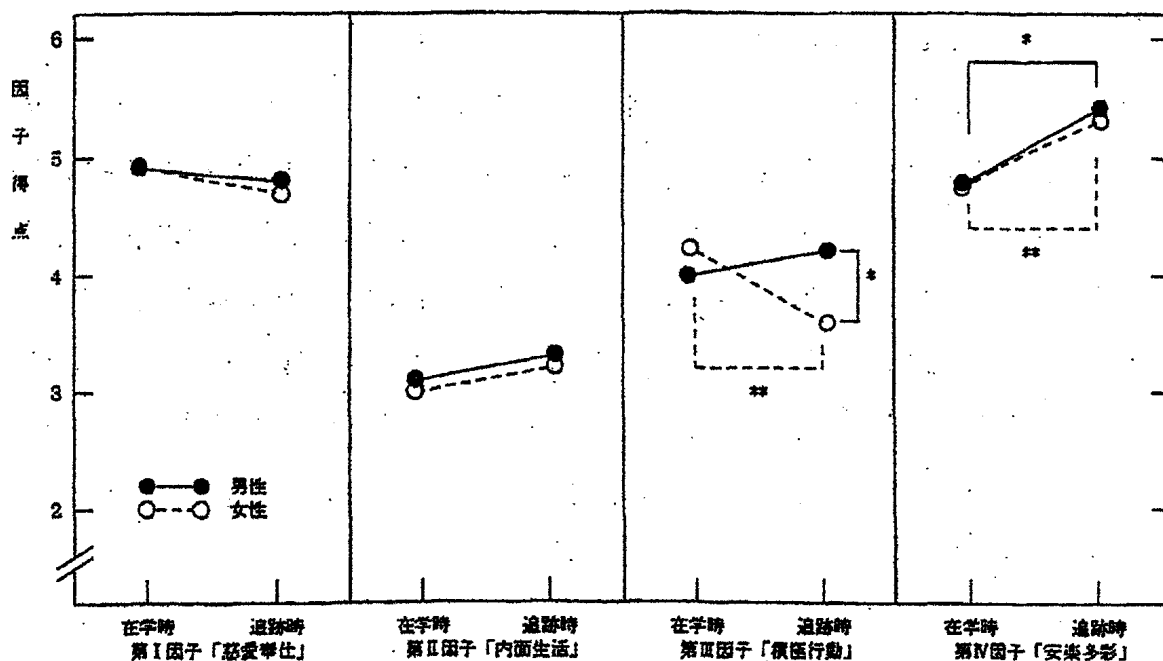


図5 在学時と追跡時における男女の平均因子得点

また、男性の在学時と追跡時との相関が有意に高かった ($r=.60, p<.001$) のは第II因子「内面生活」であった。女性の在学時と追跡時との相関が有意

に高かった ($r=.36, p<.01$) のは第Ⅲ因子「積極行動」であった。

調査時と性による分散分析を行った結果、第Ⅲ因子「積極行動」に交互作用が見られ ($F(1,90)=6.92, p<.01$)、図5が示すように女性が在学時より追跡時に評価を有意に下げた ($p<.01$) ため、追跡時のみ男性が女性より有意に高かった ($p<.05$)。

調査Ⅱでは、第Ⅰ因子「慈愛奉仕」は、学生も両親も60年代よりも90年代の方が低く、青年期よりも中年期の方が高いという結果だった。追跡調査で男女とも有意差がないのは、時代的効果と年齢的効果が相殺したものか。あるいは、青年期に形成されたものが中年期まで変化が無く、個人内では一貫性があり、時代的比較で差異が見られたのはコーホート差であるとも考えられる。第Ⅱ因子「内面生活」は、両親が60年代よりも90年代の方が低く、青年期よりも中年期の方が高い傾向があるという結果だった。追跡調査では男女とも有意差がなく、男性は相関が有意に高かった。第Ⅰ因子と同様に二通りの考えもできるが、ここでは特に、男性は個人内での一貫性を想定した方がいいのではないだろうか。

60年代の青年期において、時代環境との交絡で獲得した人生観の二つの側面（「慈愛奉仕」と「内面生活」）の傾向を、90年代の中年期まで持ち続けたと考えられる。Baltes (1968) や Elder (1974) は異なる時代に属する人たちは、彼らが生活をした時代によって異なる経験を持つと指摘しているが、これらの二つの側面に関しては中年期の90年代より青年期をすごした60年代の方が、彼らの価値志向の形成にとって重要な時期であったと考えられる。

第Ⅲ因子は、性差が見られ、特に母親が低かった。追跡調査でも女性のみ中年期に低くなった。この因子は社会的役割によって変化する因子と考えられる。

第Ⅳ因子は学生も両親も60年代よりも90年代の方が圧倒的に高くその傾向は女性に強く見られた。追跡調査でも、その時代的効果は色濃く受けており、男女とも中年期の方が高かった。

ところで、被験者個人毎の第一位因子（個人内で4因子中、因子得点値が

最も高い因子)に注目すると、表4より、在学時には第Ⅰ因子「慈愛奉仕」で追跡時には第Ⅳ因子「安楽多彩」へ変化したのは22名、第Ⅱ因子「内面生活」、あるいは第Ⅲ因子「積極行動」、または複数の因子から第Ⅳ因子「安楽多彩」へ変化したものは13名であり、在学時も追跡時も第Ⅳ因子「安楽多彩」だったものは25名を加えると、被験者は92名中60名(約65%)が追跡時に第Ⅳ因子を第一位因子に選び、著しく増加したことが分かる。

表4 第一位因子の動向
(n=92)

在学時		追跡時	n
I	→	I	13
I	→	III	2
I	→	IV	22
II	→	I	2
II	→	IV	2
III	→	I	3
III	→	III	2
III	→	IV	6
IV	→	I	8
IV	→	III	2
IV	→	IV	25
I	→	I IV	1
I III IV	→	IV	1
I IV	→	IV	1
II III	→	IV	1
IV	→	I IV	1

2 追跡調査における事例研究

2. 1 目的

前章では質問紙法によって、60年代と90年代間の学生と両親の比較、および学生と両親間の関係性の比較によって、人生観の時代的变化を見てきた。さらに、その時代的变化の中で、60年代の学生が人生観においてどのような発達的な変化をしたのか、卒業生の縦断的追跡調査によって捉えてきた。

ところで人生観の発達的变化を詳細に捉えるには、被験者に生じた環境上の変化や経験が人生観の変化とどの様に対応しているのかを明確にすることが重要であろう。それにはそれぞれの卒業生の人生観の個人差の由来や背景を探ることが肝要となる。

そこで本章では、被験者の人生観と、彼らにとって最も身近な社会化のエ

イジェントである両親との関係、さらに被験者が社会をどの様に認知しているかを面接法によって調査する。

Adorno, et al (1950) は、F尺度の高得点者が両親に対して紋切り型の賛美をするにもかかわらず、時々敵意をちらつかせること、低得点者は両親に対して客観的評価をすることを面接資料から抽出し、権威主義的人格の第一の成因を幼児期における親子関係と考えた。人格の構成要素の一つである人生観の形成においても幼児期の親子関係が重要と思われる。回顧的資料ではあるが、大学入学以前（子供の頃）と大学時代に関しても、現在と共に面接調査を行うことにする。

ここで取り扱う被験者は、1942年から1947年生まれで、第二次世界大戦以前に教育を受けた両親に育てられ、戦後の混乱期に子供時代をおくり、大学生時代には学生運動を多かれ少なかれ経験し、日本経済の高度成長期と共に成人した、いわゆる団塊の世代である。彼らが、大学入学以前、大学時代、そして現在の3つの時期において、親子関係、その他の対人関係、知的文化的環境、社会経済的環境、時代的エートスという5つの側面で、どの様な認知をしたのか、どの様な感情を持ったのかを人生観との関係で明らかにするために、面接整理表（分類の視点）を表5のように作成した。親子関係やその他の対人関係の側面では誰に同一視をしたのか、被験者の個人的な知的文化的環境や社会経済的環境の側面、また時代的エートスの側面では、それらをどの様に認知し、適応したのかという心理的機制が考えられる。面接整理表の記述の中から、自己認知を変え人生観を変化させる要因や、それぞれの時期においてどの様に同一化を行っていたのかが読みとれると思われる。

そこで、学生時代から追跡時までには人生観の基本的構造のプロフィールが大きく変化した被験者と、一貫性があった被験者の、それぞれの面接資料を手掛かりにして、人生観の形成の様相を明らかにすることが本章の目的である。

仮説1-1：学生時代から追跡時までには人生観の基本的構造のプロフィールに一貫性があった被験者は、学生時代あるいはそれ以前に人生観を形成した

表5 面積整理表（分類の視点）

人生観の形成要因と同一化の様相

（大学入学以前（子供の頃）・大学時代・～現在）

心理的機制	要因と考えられるもの（誰が何を～した）
A. 同一視	被験者と両親との関係に関する記述。
1. 親子関係	父親、母親に関する記述。
2. その他の対人関係	両親以外の対人関係に関する記述。 被験者が心理的に近い（遠い）と考えた人に関する記述。
B. 環境への適応	被験者の教育環境（専攻分野、影響を与えられた著作も含む）に関する記述。比較文化的記述。
1. 知的文化的 情報的環境	例：海外在住によって～ キリスト教への関わり方 寮生活で～
2. 社会経済的 環境	被験者自身の仕事、職業、業績、地位、および経済的狀態に関する記述。
3. 時代的 エートス	被験者が考えている60年代、90年代それぞれの時代的特徴、および、それに対する関わり方。 例：学生運動に関する記述 現代の若者論 日本の経済事情
C. その他の 特記事項	健康問題など。 被験者自身の人生観、その変化に関して特に強調していること

と考えらる。

仮説1-2：変化した被験者は、自己認知を変化させるほどのLife eventがあり、それをLife eventと認知させる要因は子供の頃からある。

仮説1-3：変化した被験者の多くは、時代的エートスの影響で、質問紙法によって時代的傾向として捉えられた第IV因子「安楽多彩」へと変わる。

2. 2 方法

被験者：面接承諾者 19名（男性9名、女性10名）

手続き：卒業生92名に面接の依頼状を往復葉書で発送し、承諾の得られた被験者19名と面接の日時と場所などの打ち合わせを電話で行った。面接は1995年2月の下旬から4月上旬に、1時間半から2時間かけて実施した。

分析の方法：

1. 面接内容はテープに収め、逐語再生記録を作成する。
2. 各被験者毎に、面接内容を、大学入学以前、大学時代、および現在の3つの時期における5側面に分類整理する。
3. 変化した被験者群と一貫性のあった被験者群それぞれの特徴を面接整理表から抽出し、典型例を提示する。

2. 3 結果と考察

逐語再生記録から整理表への分類整理方法は、「誰が何を～した」の記述に近い形で、再生記録に下線を引き単位分けをし、面接整理表の分類の視点に従って整理をした。判定を依頼した大学院生と筆者の評定一致度は約80%で、不一致部分は相談の末、分類した。

変化した被験者と一貫性があった被験者を分類するため、19名の「13の生き方」の在学時と追跡時それぞれの第一位因子と因子および生き方の得点がマイナスからプラス、あるいはプラスからマイナスへ大きく変化したものを纏めて因子および生き方の動向を示したものが、表6である。

2. 3. 1 第一位因子が一貫していた事例（仮説1-1）

表7から、在学時から追跡時において第一位因子に変化がなかったのは6

名で、両調査時とも第Ⅰ因子のものが2名（事例9、19）、第Ⅲ因子のものが1名（事例8）、第Ⅳ因子のものが3名（事例11、12、14）であった。しかしながらそれら6名も他の因子や様々な生き方で大きく変化をしているが、ここでは第一位因子に変化がなかったものを一貫性のある被験者と考える。

第Ⅰ因子で一貫性のある事例9（男性）は、大学時代の知的文化的環境の側面で、ICUの4年間は非常にリッチな教育を受け、学校の生活に十分満足している。そして現在では、学生

時代の友達と付き合い、アメリカンスタイルの教育を評価し、同じ寮だった友達の動向を事細かに述べている。大学卒業後の経済的社会的環境では職場で上司に殴られたり、周りの人たちと色々な摩擦を起こしている。生きていくのに一番大切なものは学生時代は曖昧な自己実現であり、現在は自己実現と充実感であると述べている。

事例19（女性）は、大学時代に、自分が前から何となく思っていたことが新しく確固たるものになった。ICUで信仰が強められた。ICUを出たとなん、自分は全くのマイノリティだと思った。人生観は余り変わっていないが、その表し方が変わったと述べている。

表6 面積被験者の因子および生き方の動向

ID	第一位因子		大きく変化した因子および生き方	
	在学時	追跡時		
①	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ：1位 → 4位	L1L2L4L9 + → -
②	Ⅳ	Ⅰ	L6：- → +	L11：+ → -
③	Ⅳ	Ⅲ	L6：- → +	
④	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ：2位 → 4位	L5L6 + → -
			L9L12：- → +	
⑤	Ⅰ	Ⅳ	Ⅳ：3位 → 1位	L3L5 + → -
			L4：- → +	
⑥	Ⅰ	Ⅳ	Ⅱ：4位 → 3位	L9 - → +
			L5：+ → -	
⑦	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ：2位 → 3位	L10L18 + → -
			L8：- → +	
⑧	Ⅲ	Ⅲ	L2：- → +	L10：+ → -
⑨	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ：3位 → 4位	L3L8L11 + → -
			Ⅲ：4位 → 2位	L12 - → +
⑩	Ⅰ	Ⅳ	Ⅰ：1位 → 3位	L3L6 + → -
			Ⅱ：4位 → 2位	L8L9L11L12 - → +
⑪	Ⅳ	Ⅳ	Ⅲ：2位 → 3、4位	L3L5 + → -
			L1L9：- → +	
⑫	Ⅳ	Ⅳ	L2L10：+ → -	L11：- → +
⑬	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ：1位 → 3位	L5L7 - → +
⑭	Ⅳ	Ⅳ	L3：+ → -	
⑮	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ：4位 → 2位	L8L8 - → +
			L2：+ → -	
⑯	Ⅰ	Ⅳ	Ⅳ：4位 → 1位	L6L7L8L9 - → +
			L11：+ → -	
⑰	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ：1位 → 2位	L8L12 + → -
⑱	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ：3位 → 1位	L5L6 - → +
⑲	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ：2位 → 4位	L5L6L9L11L12 + → -
			L2：- → +	

60年代のICUで最も優勢であった第Ⅰ因子「慈愛奉仕」を自分の人生観として形成した事例9と事例19が、社会に出て様々なストレスを受けながら自分をマイノリティと認識している姿を面接資料から読みとることが出来る。事例9には拒否性（Erikson,1982）が見られるが、事例19は表現方法を変えて環境に適応しようとしている。

第Ⅲ因子「積極行動」の事例8（女性）は、祖父の時代に日本に来てずっと横浜に住んでいる中国人であり、この被験者は、社会経済的に日本の社会で中国人ということで制約を受けていることを大学時代も現在も語っている。「ICU生って、何か満足しないで追いかけているところ、何かしてないと落ちつかないところがある。何か一つ勉強みたいな事をしてないと耐えられない。中国文化も日本文化も知っているし英語もやっているの、違う文化の中で自分が果たす役割があるような気がする。」と述べている。また被験者は43歳の時の離婚や子育てから人生観が変わった、達観し自分の気持ちに素直に生きていると述べている様相は、「13の生き方」のL2（達観）が上昇し、L10（克己）の下降に現れている。しかし因子が余り変化していないのは、面接資料の随所に出てくる日本における中国人としてのアイデンティティが、この被験者の人生観で最も大きな場所を占めており、学生時代から現在まで、異文化の中で協同的に積極的に生きようとしているのではないかと考えられる。

第Ⅳ因子「安楽多彩」の事例11（女性）は、「学生時代は母の思う通りにしてきた、現在は自分は母から凄く影響を受けている、ものの考え方はほとんど同じだと思う。また、生き甲斐なんていうものはそのときどきによって違う、非常に流動的なものではないか。そして、今の生き甲斐は夫よ。」と述べ、母親が高名な法律学者の父親を補佐したように、この被験者も通訳などをして外務省勤めの夫を補佐している。

事例12（女性）は、学生時代は予習復習で精一杯だった。卒業後、ICUで学んだ英語を生かし、ずっと中学の英語の教師をしている。もう一度大学に戻って勉強をしたい。学生時代も現在も人との関わりが一番大切だと思うと

述べている。この被験者は大学卒業直後に母親を亡くし、世の中がひっくり返ったような感じがした。人の命に限りがあることをひしひしと感じた。また、進路などは父親の言うとおりにして来たと述べている。

事例14（男性）は、学生時代に出会ったアメリカへの憧れ、ICUでのかつこのいいインテレクチュアルなアメリカ人の先生達との接触を語り、そして自分自身を英語の文化圏を一生懸命に憧れて勉強してきた人と評している。この被験者は、ICUで身につけた英語力を駆使しながら家族の生活を支えるためにコンサルタントとして猛烈に働いてきたこと、その中で社会的背景の違った妻との葛藤があり離婚騒ぎがあるが、家族に対する愛情が一番大切だと、実に事細かに自ら語ってくれた。

以上の3事例の共通点としては、ICU時代に身につけた英語を今も使い続けていることが面接資料から読みとれる。

第一位因子が在学時から追跡時まで変化しなかった6名で共通していることは、ICUの国際性、キリスト教、教育、学生生活の中のどれかを非常にポジティブに評価していることである。一方、後述する変化した被験者のほとんどは、学生運動に関わり、大学にある程度の距離を置き、大学に対して批判的なことも述べている。（詳細は2. 3. 2と2. 3. 3）

2. 3. 2 第一位因子が変化した事例（仮説1-2）

在学時から追跡時に第一位因子が変化したもののの中で、第I因子に変化したものが4名（事例1、2、13、17）、第III因子に変化したものが2名（事例3、18）、第IV因子に変化したものが6名（事例5、6、7、10、15、16）で、在学時には第I因子だったが追跡時には第IとIV因子になったものが1名（事例4）である。

第I因子に変化した事例1（女性）は、面接ではミッションスクールの高校時代に持った人生観、「共に生きる」がずっと変わっていないと述べている。しかしながら整理表を見ると、大学時代は専攻が「ヒューマニ」で人とは何かを考えながら本を読んでいたとか、クリスチャンの母親のアンビバレ

ントな態度に批判的であり、学生運動に関わっていたという記述がある。しかし現在では娘のミッションスクール入学を契機に奉仕活動をしているし、母親と同じようなことをやっているとも述べている。

事例2（女性）は、表7から分かるように第一位因子以外は因子レベルで変化していない。この被験者は両調査時とも、第Ⅰ、Ⅳ因子がプラスで類似した得点値を示し、第Ⅱ、Ⅲ因子がマイナスの得点を示しており、人生観の基本的プロフィールは余り変化していないと思われる。この被験者は母親がクリスチャンの家庭に育ち、大学時代は福祉関係の障害児教育をやるため、心理学を専攻し、学生運動に関わっていた。現在は乳ガンの手術や義兄の死を通して、死ぬことが恐くなくなり、これだけは大切に譲れないという執着がなくなり、一日一日を大事に生きたいと思っている。向こうが求めて下さるのならば、それにこたえて付き合うのを大切にしたいと述べている。

事例13（女性）は、クリスチャンではないがクリスチャンマインドを持った父親と商売に忙しい母親の家庭に育ち、大学時代入学当時はカルチャーショックを受け、American ways of lifeに憧れ、セクションメイトと結婚をした。現在最も大切なことは家族で信頼しあって暮らすことと述べている。この被験者は、ものの考え方の基礎はICUで養われた。また、人に対する思いやりの気持ち、世界を見られるようになったのはICUのおかげと考えている。

事例17（男性）は、学問的水準が高く、キリスト教の視野に立っているICUに絶対入りたくて入学した。ICUで一番得たものは学生運動と述べている。失恋や勉強の劣等感を矢内原の「嘉信」によって慰められ、3年生の時クリスチャンになった。現在は地方の国立大学で哲学を教えているが、躁鬱病と診断され、自殺未遂を起こしたこともある。自分が何とか危機的状況を克服できたのは聖書との出会いと述べている。

以上第Ⅰ因子に変化した4名の中で事例17を除いて共通していることは、女性であるということと、キリスト教的価値観を持った親の家庭で養育されていることである。青年期には様々な人生観を持っていたとしても中年期になり母

親になったとき、キリスト教的な第Ⅰ因子「慈愛奉仕」に回帰するのかもしれない。幼少期にクリスチャンホームであったという記述があるのは残りの事例中、一貫して第Ⅰ因子であった事例19のみである。

第Ⅲ因子に変化した事例3（女性）は、学生時代は社会的な問題に関心があり、学生運動に関わっていた。現在は基本的なものの考え方は変わっていないが、障害を持った次男を育てることによって、「エエカッコシイ」のところがなくなり、恐いものがなくなった。日々、障害のある子どもたちが生き生きとして暮らしていくための環境づくりに奔走している。

事例18（男性）は、因子のプロフィールが追跡時に著しく変わっている。整理表の記述によると、「考え方も、ある態度の決め方も学生時代と違って、立場上、強く出さなきゃいけない。それをずっとやってくとそれが生き方になるんです。抱え込みすぎだ、マニアックだといわれている。ワーカーホリックなのかもしれない。」とある。この被験者はケミカルの会社の企画営業部長をやっており、業績が悪い会社を建て直すために日々努力していることが、面接の質問項目にほとんど仕事の視点から回答することからも窺えた。

以上第Ⅲ因子に変化した2名は、障害を持つ子の母親としての役割、会社を建て直す企画営業部長としての役割、それぞれの役割が人生観に色濃く反映しているのが面接資料から読みとれた。第Ⅲ因子は量的解析において社会的役割によって変化するものと結論されたが、これらの事例は上記結論の妥当性を高めることになる。

しかしながら、事例3は母親が病気の祖父を引き取り面倒を見たことが子供時代のものの見方に大きく影響したと述べており、事例18は就職したことによって父親と話しが出来るようになりサラリーマンの父親への理解を深めたと述べている。社会的役割によって突然人生観が変化するのではなく、すでに事例3には母親というモデル、事例18には就職による父親との関係回復が潜在的にあり、その上に強烈な経験をし、責任が重い役割を演じつつ、人生観が変化してきたと思われる。

2. 3. 3 第IV因子に変化した事例（仮説1-3）

90年代優勢になった第IV因子に変化した事例5（女性）は、高校時代にAFSでアメリカに行き、そこで日本に対する差別的な目を見て、ICUで英語を勉強して日本のことをきちんと説明できるようになりたいという使命感を持っていた。学生時代は広島長崎被爆者巡礼団のコンパニオンとして、アメリカ、ヨーロッパ、ソ連を回った。結構贅沢な暮らしをしながらの学生運動にギャップを感じていたが、自分自身もブルジョア的なものを求めている。現在は両親の看護から医療システムに問題を感じ、医療倫理、医療人類学を勉強するため大学院に入学した。時代的エートスの側面での「女性学が段々に学問として成立してくると、罪悪感を感じないで社会に出ることが出来る」という記述からもこの被験者が、時代の流れに敏感な人であるということが分かる。

事例6（男性）は、因子レベルの変化と言うよりもむしろ、追跡時に、L9（受容）が著しく上昇し、L5（協同）が著しく下降したという特徴がある。学生時代は授業料反対でハンガーストライキをやった。安保条約にも何となく反対だった。6年間ニューヨークに駐在したとき外から日本を見て、自分は防衛に対する価値観が決定的に変わったと述べている。さらに、閑職に就いたことをきっかけに、自分は日本人であるというアイデンティティを持ってまだ埋まらないものがある、それは死というもので、従容として死の床につけるかどうかと考え、クリスチャンになった。

事例7（男性）は、因子の変化も大きい、L10（克己）の著しい下降と、L8（安楽）の著しい上昇に特徴がある。入学当時はあらゆる方向に知識を伸ばしたいと考えていた。学生運動に深く関わり、同じ体育系のクラブの先輩と結婚をした。どういう家庭を作るかなど1つ1つ話し合い、子供を作らないことにした。妻は公務員になり、自分は色々転職した。10年前外資系の会社に入り、豊かになりたいと思うようになった。48歳だから先を見つめなきゃいけないと述べている。

事例10（女性）は、高校時代AFSでアメリカに行き自由と物質文明に驚き、アメリカで他人の家庭で何とかやっていけたことで自信を持った。学生時代は、学生運動をやってる人たちのシンパだった。フランスに留学し、同時通訳者になり、仕事の業績やお金を稼ぐということに強く捕らわれている時期があったが、ヨガを始めて以来、命の尊さ、自分が生かされていることがありがたいと思えるようになった。そろそろ現役から引退しようかと思っている。

事例15（男性）は、学生時代は友達の中に自分から飛び込もうとしないところを変えたいし、自分の思想もできるのではないかと学生運動をしたが、いい加減に中途半端に終わった。高校教師をした後アメリカに留学し、親が高級官僚の韓国人女性と結婚した。クリスチャンである妻の影響で、クリスチャンになった。自分がこの春まで勤めていた大学のことで妻は韓国の両親や友達に肩身が狭い思いをした。生きていく上で最も大切なことは家族の結びつきとクリスチャンとして歩いていくことと述べている。

事例16（男性）は高校時代、AFSでアメリカに行き、豊かさにショックを受け、視野がぱっと広がり、日本のことを勉強したいと帰ってきた。大学時代は2年間休学をしてアメリカで通訳をしたりヨーロッパに行ったりした。学生運動もし、貧困開発途上国の問題に対して苛立って、全てが直ぐ変わらなければいけないと考えていた。現在は自分の出来ることは非常に限られている。一人ぐらい頑張っても世の中は大して変化しないだろう。最も大切なことは息子をちゃんと育てることと身近な友達にちゃんと接して裏切らないことだと考えている。

在学時が第Ⅰ因子で追跡時には第ⅠとⅣ因子に変化した事例4（男性）は、ICUのキリスト教的雰囲気の影響を受けた。しかし大学紛争の中でのクリスチャンや教授達への幻滅は大きかった。悩みを持っている人の側に居られるような仕事をしたいなって思っていた。それは今もずっと続いていると述べている。

上記の事例4も含め第Ⅳ因子に変化をした7名中は6名は学生時代は第Ⅰ

因子が第一位因子である。彼らは、60年代は第Ⅰ因子が優勢で90年代は第Ⅳ因子が優勢という時代的傾向に適合している。ほとんどが若い頃、海外在住経験が豊富で学生運動にも関わっており、時代の動きに敏感な人たち、あるいは時代を先取りしている人たちと思われる。

2. 4 結論

前述したように、幼少期にキリスト教的価値観を持った親の家庭で過ごした被験者（事例1、2、13、19）が、中年期に第Ⅰ因子「慈愛奉仕」を第一位因子としている傾向があることは指摘できる。上記の4例と事例5、11は両親が英語に堪能などICUと似た文化背景の出身者である。その他の事例はICUとは異なった文化背景の出身者で、ほとんどがICUへの強い憧れをもって入学した。事例6、14、17の整理表の記述に、ICUへのこだわりが顕著に見られる。大学の選択に価値志向が働いており、さらにそれが大学環境の中で様々な形で強化されていた。

価値志向に一貫性のあった被験者と変化した被験者との間には、大学に対してポジティブに評価しているかどうかの違いが見られたが、変化した被験者も決して状況に応じて変化するのではなく、幼少期からの潜在的傾向が見られた。すなわち、幼年期からの経験の累積と外的現実とのあいだの均衡点として被験者それぞれの人生観がある、ということが示唆された。

3 本研究の問題点と今後の課題

60年代の学生の被験者は、授業の一環として調査が実施されたが、他の被験者には郵送法や留め置き法で実施した。調査方法の違いから被験者の動機づけや質問紙の理解度に変化が生じている可能性が大きい。また、卒業生の被験者に関しては、回収率が一割弱であったことから大学に対して特に好

意的な被験者か、非好意的な被験者のみになってしまった恐れがある。

また、被験者はICUの学生、その両親および卒業生のみで、決して日本の大学生やその両親たちを代表するものではない。しかしながら卒業生の被験者は、第二次世界大戦前後に生まれ、戦後の混乱期に幼少期を迎え、戦前の教育を受けた両親によって育てられ、戦争への悔恨と平和への願いを込めて創立されたICUで青年期を過ごし、日本経済の高度成長期と共に成人した、いわゆる団塊の世代である。方法上の制約があるにしても、戦後50年に当たるこの時期に彼らの人生観と両親との関係および社会との関係を記述しておくことは、社会的態度の変化と個人の人格形成の様相を解明する上で重要なことだと思われる。

面接調査では、卒業生の熱心で誠実な対応によって、貴重な資料を収集することが出来た。これらの資料を妥当な評定基準によって、詳細に分析することを今後の課題と考えている。また時代環境に関してより詳しく分析するには、これらの資料を評定する実験者の準拠枠 (frame of reference) も問題となるだろう。養育された時代が異なった実験者数人でこれらの資料を評定し、評定者間の比較をすることも今後の課題と考えている。

参考文献

- Adorno, T.W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D.J., & Sanford, R.N. 1950
The Authoritarian Personality. Harper.
- Allport, G. W. 1937 Personality : A Psychological Interpretation. Holt.
 (Allport, G. W. 詫摩武俊他 (訳) 1982 パーソナリティ 新曜社)
- Allport, G. W. 1955 Becoming. Yale Univ. Press.
 (Allport, G. W. 豊沢登 (訳) 1959 人間の形成 理想社)
- Allport, G. W. 1961 Pattern and Growth in Personality. Holt.
 (Allport, G. W. 今田恵 (監訳) 1968 人格心理学 (上) (下) 誠信書房)

- 浅井邦二・鈴木康子 1983 価値態度に関する研究—高校生とその親との関係
日本教育心理学会第25回総会発表論文集 394-395
- Baltes, P. B. 1968 Longitudinal and Cross-sectional sequences in the Study
of Age and Generation Effects. Human Development, 11, 145-171.
- Douvan, E. & Adelson, J. 1966 The Adolescent Experience. John Wiley
Sons.
- Elder, G. H. 1974 Children of Great Depression : Social Change in Life Ex-
perience. The Univ. of Chicago Press.
- Elder, G. H. 本田時雄・川浦康至・伊藤裕子・池田政子・田代俊子 (訳)
新版 大恐慌の子どもたち—社会変動と人間発達 明石書店
- Erikson, E. H. 1959 Ego Identity and Life Cycle. Psychological Issues
Monograph. Vol. 1 No. 1 International Universities Press.
- (Erikson, E. H. 小此木 啓吾 (訳) 1973 自我同一性—アイデンティ
ティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1964 The Life Cycle Completed. Norton.
- (Erikson, E. H. 村瀬 孝雄・近藤 邦雄 (訳) 1971 ライフサイクル, そ
の完結 みすず書房)
- 藤永 保 1991 思想と人格—人格心理学への途— 筑摩書房
- Gilligan, C. 1982 In a Different Voice. Harvard Univ. Press.
- 原 一雄 1966 大学生の価値観の研究 (その5) 自己および‘他人’の道德
判断 第8回日本教育心理学会総会発表論文集 132-133
- 原 一雄 1968 大学生の職業的価値観 教育研究 国際基督教大学 13
108-131
- 原 一雄 1970 大学生の道德的価値志向について 基督教文化会年報 16
16-27
- 原 一雄・大井 直子・岡林 秀樹 1991 大学生の価値観 (1) 人生観・宗
教倫理観・政治経済観研究の一方法論 日本心理学会第55回大会発表
論文集 624

- 原 一雄・大井 直子・岡林 秀樹 1992 ICUにおける大学生の価値観研究
アジア文化研究 国際基督教大学 別冊 3 91-100
- 原 一雄・大井 直子・岡林 秀樹 1993 大学生の価値観 (6) SD法による分析 日本心理学会第57回大会発表論文集 34
- 岩崎 正子・石塚 正一・原 一雄 1983 ICU在学生の人生観の調査研究-20年前との比較-教育研究 国際基督教大学 26 85-106
- Milgram, S. 1974 Obedience to Authority : An Experimental View. Harper & Row. (Milgram, S. 岸田 秀 (訳) 1975 服従の心理 河出書房新社)
- Mischel, W. 1968 Personality and Assessment. John Wiley & Sons.
(Mischel, W. 詫摩 武俊 (監訳) 1992 パーソナリティの理論-状況主義的アプローチ 誠信書房)
- 文部省 1992 平成3年度 学校基本調査報告書 (高等教育機関) 大蔵省印刷局
- Morris, C. 1956a Paths of Life. George Braziller.
(Morris, C. 尾住 秀雄・渡辺 照宏 (訳) 1966 人生の道 理想社)
- Morris, C. 1956b Varieties of Human Values. Chicago Univ. Press.
- Morris, C. & Small, L. 1971 Changes in Conceptions of the Good Life by American College Students from 1950 to 1970. Journal of Personality and Social Psychology, 20, 2, 254-260.
- Murphy, J. M. & Gilligan, C. 1980 Moral Development in Late Adolescence and Adulthood : A critique and reconstruction of Kohlberg's Theory. Human Development, 23, 70-104.
- Nesselroade, J. R. & Baltes, P. B. 1974 Adolescent Personality Development and Historical Change : 1970-1972. Monographs of the Society for Research in Child Development, 39, No.154.
- NHK世論調査部 1984 中学生・高校生の意識 61
- 岡林 秀樹 1995 大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷 博士論文
国際基督教大学 (未公開)
- 岡林 秀樹・原 一雄・大井 直子 1991 大学生の価値観 (2) 人生観の時代

- 的変遷 日本心理学会第55回大会発表論文集 625
- 岡林 秀樹・原 一雄・大井 直子 1992 大学生の価値観 (4) 人生観の時代
的変遷 (II) 日本心理学会第56回大会発表論文集 157
- 岡林 秀樹・原 一雄・大井 直子 1993 大学生の価値観 (8) 人生観質問紙
の簡略化 日本心理学会第57回大会発表論文集 36
- 岡林 秀樹・大井 直子・原 一雄 1994 大学生の価値観 (10) 観念的価値志
向と行動的価値志向との関連 日本心理学会第58回大会発表論文集 50
- 岡林 秀樹・大井 直子・原 一雄 1995 大学生の人生観年代の変遷
心理学研究 66 2 127-133
- 大井 直子 1989 人生観に関する心理学的一研究 —Kilbyの価値尺度改訂
への試み— 修士論文 国際基督教大学 (未公刊)
- 大井 直子・原 一雄・岡林 秀樹 1991 大学生の価値観 (3) 人生観の縦
断的研究 日本心理学会第55回大会発表論文集 626
- 大井 直子・原 一雄・岡林 秀樹 1992 大学生の価値観 (5) 人生観の縦
断的研究 (II) 日本心理学会第56回大会発表論文集 158
- 大井 直子・岡林 秀樹・原 一雄 1993 大学生の価値観 (7) 人生観の縦
断的研究 (III) 日本心理学会第57回大会発表論文集 35
- 大井 直子・岡林 秀樹・原 一雄 1994 大学生の価値観 (9) 大学生と両
親の人生観に見られる時代的变化 日本心理学会第58回大会発表論文 49
- 大井 直子・岡林 秀樹・原 一雄 1994 大学生と両親の人生観に見られる
時代的变化 国際基督教大学学報 I - A 教育研究 36 103-124
- 大井 直子・岡林 秀樹 1995 大学生とその両親の人生観における関連性
とその時代的变化 日本発達心理学会第6回大会発表論文集 219
- Osgood, C. E., Ware, E. E. & Morris, C. 1961 Analysis of the Connotative
Meanings of a Variety of Human Values as Expressed by American
College Students. J. Abnorm. Soc. Psychol., 62 (1), 62-73.
- Troyer, M. E. 藤本 隆志・藤田 恵璽 1964 日本人学生の宗教的価値指向
について 基督教文化学会年報 11 67-83

- Troyer, M. E.・大和田 康之 1964 大学における方針決定と意志決定 国際基督教大学学報 I - A 教育研究 11 105-158
- Troyer, M. E.・藤田 恵璽・北山 雅子・永野 俱子・原 一雄 1963 大学生の価値観に関する研究 教育心理学年報 3 9-10
- 山田 順子 1988 青年期の母子関係 心理学評論 31 88-99

注) 本稿は、国際基督教大学大学院教育学研究科提出論文(大井,1996)を、教育研究の投稿論文として纏め直したものである。

論文を作成するにあたり、主査の藤中保教授、副査の原一雄教授、栗山容子教授、小谷英文教授、中野照海教授には長年に亘りご指導を賜り、心から感謝しております。過去の資料を借用させていただきました諸先輩方、本研究に協力して下さった卒業生、在校生の皆様、本当に有り難うございました。様々なご配慮を下さった向井敦子講師、苦勞を共にした岡林秀樹氏、そして藤永ゼミの若き友人達の心優しき励ましに感謝しております。

A Longitudinal Study on Value Orientations in the Life Cycle (English Résumé)

To analysis the developmental changes of value orientations, it is important to consider the age and times effects. the purpose of this study are to capture and operationally define and analyze the value by 1) studying the basic value structures of value orientations based on the data gathered using a questionnaire, 2) investugating times effect on the value orientations, and 3) clarifying the value orientation characteristics of a group cohort which an individual belongs to. Finally, a series of interview was conducted to find the effects of environmental changes and individual experiences on the value changes.

1. Basic Structure of Value Orientations

Factor analysis was performed on ratings gathered by "13 ways to live" questionnaire (Morris,1956) for 4,089 subjects and four factors was extracted. Each of the factor was named as follows' "I. sympathy & service", "II. introspective life", "III. active action", and "IV. comfort & variousness".

2. Value Changes across Times

To study the times effect on the alumni who spent their adolescent years in the 60s, it is necessary to compare the adolescent subject group and the middleaged subject group in 60s and 90s.

"I. sympathy & service" was valued more by the parents in both periods than the students.

For "II. introspective life", the scores of the parents in the 90s come closer to that of students.

A different pattern was observed by the subject groups in each period on "III. active action". No significant difference was found among the fathers, mothers and male students in the 60s, while the mothers in the 90s valued it significantly lower than other two groups. In the female student's families, it was valued the most by the fathers in the 60s and about the same by the mothers and daughters. In the 90s, the difference increased between the fathers and other two. One of reasons for the mothers' low scores is considered that the females, especially the mothers, are likely to be in the social position or role in which "active action" is not a required character.

For "IV. comfort & variousness", there was no significant difference among the three groups in the 60s, while it was valued more by the mothers and students than the fathers in the 90s. This is an indication that the mothers and students emphasize "flexibility", "peace and comfort" in their life.

3 . Comparison of Life Values between Adolescents and Middle-Aged Subjects

A follow-up study was conducted on 92 alumni who were students in the 60s to investigate the changes in values in their middle-aged period.

For "I. sympathy & service", the follow-up study showed no significant difference for both males and females. It is assumed that the age and times factors both affected the individual's value system in a opposite direction causing no change in their scores or it can also be assumed that the difference was caused by a difference in cohorts.

For "II. introspective life", no difference was observed between the males and females in the follow-up study. And the correlation between the two periods was significantly high. It is assumed that there is a consistency in each

individual male subject for the value.

For "III. active action", the follow-up study also showed a marked decrease in females. This factor is considered to be affected by social role.

For "IV. comfort & variousness", the follow-up study also indicated the times effect and it was rated higher in the middle-aged period than the adolescent period for both males and females.

4. Case Study in the Follow-up Subject

An interview was conducted on 19 alumni subjects to study how the environmental changes and experiences affected the value changes.

A difference in evaluation to the university was observed between the subjects whose value remained constant and those whose value changed. For the subjects whose value changed, not only the situational factors but also accumulated personal experiences are considered to play an important role in value changes. It is assumed, therefore, that an individual's value resides in the point of equilibrium between accumulated personal experiences and outside reality.